

私はソーシャルワーカー

駒澤大学・社会福祉士 荒井 浩道

「ソーシャルワーカー」というアイデンティティは、研究、教育、そして実践という私が行なっている 3 つの活動に共通する基盤です。このアイデンティティは、私の研究、教育、実践活動のバランスをとるうえでとても有益でした。

私はソーシャルワークの方法論系の科目（相談援助の基盤と専門職、相談援助の理論と方法、相談援助演習、相談援助実習等）を担当し、ソーシャルワーク方法論を研究テーマ（ソーシャルワークにおけるナラティブ・アプローチ、セルフヘルプ・グループとしての認知症家族会等）とする大学の教員です。そして実践活動として、地域包括支援センターの社会福祉士（非常勤）として総合相談支援業務、権利擁護業務を担当しています。「ソーシャルワーカー」というアイデンティティは、このような複数の活動を行なっている私がバラバラにならないように繋ぎ留めておく「根っこ」として有効に機能していました。

しかしここ数年、このアイデンティティを意識しないで研究、教育、実践活動を行う機会が増えたように思います。それだけでなく、このアイデンティティと、研究、教育、実践活動のあいだにコンフリクトが生じるようになりました。このこと背景には、私の個人的な変化だけではなく、よりマクロな社会的な変化があったと考えています。

近年、大学教員の研究活動を取り巻く環境は、大変厳しくなっています。たとえば、学内の研究費が削減されるなか、各教員は、科研費や民間財団等の競争的研究資金を外部から獲得することが強く求められています。競争的研究資金の審査に通過するためには、自由なスタンスで申請書を作成するのでは不十分で、審査を通過できるテーマを選び、審査を通過できる内容で書くなどの技術が必要になってきます。このような作業を繰り返していると、いつしか、「ソーシャルワーカー」というアイデンティティよりも、「職業研究者」というアイデンティティの方が強くなってしまいます。

また大学における教育環境も徐々に変化してきています。この変化は、とくにソーシャルワーク方法論系の科目を担当する私にとってとても大きく感じます。周知のとおり、平成 19 年の法改正により、ソーシャルワーク方法論系の科目の教育内容の標準化が図られました。このことは、社会福祉士養成教育の水準を担保するうえで非常に重要なわけですが、反面、裁量あるソーシャルワーク教育を行うことが難しくなったように感じます。また、国家試験の大学別合格率が公表されるようになったことから、各大学は国家試験対策に熱心に取り組んでいます。こうした背景から、教育においても、「ソーシャルワーカー」というアイデンティティは後景化し、「職業教員」というアイデンティティが前景化します。

さらに実践活動においても社会的な変化は無視できません。日本のソーシャルワーク実践は法制度の影響を強く受けるため、法制度の変更は支援実践に直接的な影響を与えます。

たとえば、平成 18 年 4 月に全国で設置が進んだ地域包括支援センターも業務も当初期待されたソーシャルワーク機能よりも介護予防に重点がおかれています。また、介護保険法を根拠法とする地域包括支援センターでの支援実践は、多問題家族への対応などにおいて限界を抱えることとなります。このような実践を積み重ねていると、やはり「ソーシャルワーカー」というアイデンティティは薄まり、「職業ワーカー」としてのアイデンティティが濃くなっていくように感じます。

このように、ここ数年の私の「ソーシャルワーカー」というアイデンティティは、危機的状態にありました。だからといって個人的には何も出来ず、ただ現状に身を委ねる状態が続いていました。

ところが、つい最近、私の「ソーシャルワーカー」というアイデンティティが強い刺激を受ける経験がありました。それは、2012 年 7 月 8 日（日）～12 日（木）にストックホルム（スウェーデン）で開催されたソーシャルワークの国際会議（Social Work and Social Development: Action and Impact）に参加したことです。

国際会議では、Eva Holmberg-Herrström 氏、Michelle Bachelet 氏、Christian Rollet 氏、Maria Larsson 氏、Thomas Hammarberg 氏、Tom Shakespeare 氏、Vishanthie Sewpaul 氏などの世界的著名な方々の講演が行われました。また、Human Rights and Social Equality, Active and Dignified Ageing, Protecting rights of elderly – values and dilemmas, Disaster management and family, Managing care for older persons, Social work profession, Social work practice – participation and sustainability, Social work online などのとても多様な部会が設定され、活発な議論が行われました。日本からも多くの参加者があり、積極的な研究発表を行っていました。私も個人的に、”Great East Japan Earthquake: Visualizing the voices of the victims - Text mining based on SNS analysis” と題した研究発表を行いました。

大会期間中、非常に多くの「ソーシャルワーカー」という言葉を聞きました。私自身も「ソーシャルワーカーとしてどう考えるか」という質問をされました。世界中の参加者と「ソーシャルワーカー」というアイデンティティを共有することのできた経験は、私にとって非常に新鮮で、魅力的なものでした。

次回の国際会議は、2 年後の 2014 年 7 月にメルボルン（オーストラリア）で開催されます (<http://www.swsd2014.org/>)。その時は、胸を張って「私はソーシャルワーカーです！」と言えるように、日々の研究、教育、実践活動を行なっていきたいと思えます。